

## 執筆者紹介

樋口 博美 本学人間科学部教授  
宮寄 晃臣 本学経済学部教授  
飯田 謙一 本研究所研究参与  
柴田 弘捷 本研究所研究参与

石川 和男 本学商学部教授  
村上 俊介 本学経済学部教授  
池本 正純 本研究所研究参与

## 〈編集後記〉

月報 2017 年 12 月・2018 年 1 月合併号として「2017 年度夏季実態調査（北前船の足跡をめぐ）特集号」をお届けいたします。社研ではこれまで何らかの「テーマ」を掲げた実態調査を重ねてまいりました。2016 年から 2017 年にかけて、社研に所属する先生より、「北前船をテーマとしてみては」という提案がございました。北前船については、その航路が思い浮かぶだけで、実際にどのような活動をしていたのか、まったく不案内なものでした。しかし、一旦、その寄港した場所を実態調査での訪問地候補をあげていけばいくほど、かなり広範囲を航行し、さまざまな商品を運び、商い、さらには各地で文化形成にも関わっていたことが次第にわかるようになりました。

今回の夏季実態調査（2017 年 9 月 10 日～9 月 13 日）では、訪問先の多くの方のお力添えをいただき、非常に有意義な実態調査となりました。その行程記録については、巻頭の樋口事務局長の行程記録に詳しくありますが、15 名の参加者が新千歳空港に集合し、いささかバスの到着が遅れたものの、最初の訪問地である小樽に向け出発いたしました。小樽では北海道でのブドウ栽培・ワイン醸造とその販売について、翌日の余市での実態調査を含めて宮寄所長が取り上げられております。また飯田参与は北海道全体のワイン生産とわが国のワイン市場について取り上げられておられます。2 日目は午後には室蘭に入り、函館どつく室蘭製作所を見学いたしました。柴田参与はかつて鉄のまちとして繁栄した室蘭市の盛衰と再生について取り上げられました。3 日目はあいにくの天気でしたが、室蘭新日鐵住金を見学後、昼食のお弁当の到着にハラハラしながらようやく受け取り、江差のまちへと向かいました。江差は北前船の寄港地であり、これを取り上げた地域活性化については石川所員、初日の小樽と 3 日目の江差については村上前所長が取り上げられております。そして池本参与は 1000 以上もの歌詞があるとされる江差追分についてさまざまな角度から取り上げられております。

本合併号は、参加者全員からの寄稿とはなりませんでした。執筆いただいた参与、所員が訪問地を見て、感じ、聞き取りをした中においてそれぞれの視点からの研究成果といえます。今後も「北前船」の寄港地やその活動、さまざまな文化をテーマとした実態調査の企画、調査実施、寄稿を期待したいと思います。(K)

---

2018 年 1 月 20 日発行

〒214-8580

神奈川県川崎市多摩区東三田 2 丁目 1 番 1 号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

The Institute for Social Science, Senshu University, Tokyo/Kawasaki, Japan

(発行者) 宮 寄 晃 臣

製 作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前 2-10-2 電話 (03)3404-2561

---